

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 110 2018年6月23日発行



チェルノブイリ32年・福島7年救援キャンペーン 広河隆一講演会 チェルノブイリが福島に問うこと



1986年4月26日にチェルノブイリ事故が起きてから今年で32年。チェルノブイリ子ども基金は、1991年4月に設立してから27年です。去る4月20日（金）、東京・練馬区のココネリホールでチェルノブイリ32年・福島7年救援キャンペーンを開催しました。当日は216人の来場者があり、34人のボランティアの方々にお手伝いいただきました。また、開演前にはフルート奏者の吉原りえさんがオリジナル曲を演奏してくださいました。

チェルノブイリの経験は生かされているのか、いま福島では何が起きているのか。子ども基金設立者の広河隆一さんと、「いわき 放射能市民測定室たちね」事務局長の鈴木薫さん、当基金事務局長・佐々木真理の活動報告とあわせて、お話の概要をご紹介します。

～甲状腺手術を受けた親と子どもの保養～



★ ★ ★ 事務所移転のお知らせ ★ ★ ★

2018年5月12日に下記へ移転しました。

新住所：〒177-0041 東京都練馬区石神井町3-16-15-408

Tel/Fax、E-mailは変更ありません。

広河隆一講演会 チェルノブイリが福島に問うこと

(この文章は、4月20日の救援イベントで広河隆一が発言したものに自身が加筆したものです。)

◆どうすれば子どもを守れるか

今、私は非常に不安な気持ちになっています。なぜなら、福島原発事故がなかったことにされてしまうかもしれない分岐点に立っているのではないかと思うからです。人体に被害を及ぼすほどの放射能が出なかったという勢力があまりにも強く、力を盛り返していて、そのため、放射能には気を付けなければならないと声をあげると「お前は不安を煽るのか」と非難され、甲状腺検査を受けたい人も、保養に行きたい人も叩かれるという、そんな無茶苦茶な時代に突入しようとしています。

反原発派の人だけでなく、良心派・理性派の識者たちといわれるような人たちさえも、そういう意見に与するようになってしまった。この国はどうなってしまったのでしょうか？

彼ら——あたかも福島の事故はなかったことにしようという勢力——は、その動きに反対する私たちのことを、「差別主義者」だと言っています。何に対して差別するかと言ったら、不安を煽ることによって福島の人たちが幸せに生きることを妨げている、というのです。健康に影響ある放射能も出ていなかったのに、甲状腺検査が必要というのは、放射能が健康に影響あるほど出ていたということになり、そんなことを福島の人が聞いたら不安に思うではないかと、彼らは言います。それは不安を煽ることに結びつく。

しかし実際に、福島では多くの子どもたちが甲状腺がんになっています。彼らが言うには、この甲状腺がんは、一生心配のないもので、大勢を徹底的に検査したため、心配ない病気も見

つかってしまっているのだと言うのです。しかもこれは放射能とは何の関係もない、と。この考えは国際的にも正しいと証明されていると言うのです。

それなのに、甲状腺検査をしないといけないということは、子どもたちが危険な状態になっているのと同じで、子どもたちも親も心配になるだけだ。だからもう甲状腺検査はやめたほうがいい、という無責任な論理です。

保養の問題もそうですね。保養に行かないといけないくらい福島は汚染されているのか？と、彼らは子どもを保養に送りたいという人に対しても、攻撃してくるわけです。

彼らのこの理由も、甲状腺検査は必要ない、中止しようという理由と同じですね。福島を覆った汚染の規模というのは、健康には一切害を与えない、そういう程度のものであるということが科学的に証明されている。それなのに、そこから逃げないといけないのか、保養に行かないといけないのか、検査しなければいけないのか、と彼らは考えるわけです。そして放射能汚染で病気になるはずもないのに病気を調べようとする人たちは、福島を差別し貶める人間たちではないか、と言っているわけです。そしてまだ福島には戻りたくないという自主避難者たちも攻撃的になっているのです。

でも本当に彼らが言うように、福島原発事故で放射能は健康に影響があるほどは出なかったのでしょうか。それは国際的に確認されているのでしょうか。実はそれは間違っているのではないかと多くの学者がいるのです。その人たちは、大した放射能は出なかったという専門家は、たとえそれが国連の学者であれ、原子力産業とつながる学者たちだというのです。それに事故の時、放射能を測定するモニタリングポストの多くは壊れたり、電気がなくて測定できず、本当に人々が浴びた放射能を計ることがで

きたのは、ほんの少数なのです。病気になる放射能の値というものも、学者によってさまざまに言われているのです。今後のことを少しでも心配して、万が一のことを考えるのがリスク管理だとしたら、勝手な自分たちに都合のいい理論だけを集めて、「安全論」を振り回すのではなく、人々の不安にきちんと向き合わなければなりません。そのためには検査は必要だし、心理的なストレスから子どもたちを解放して抵抗力をつけるために保養も必要だと考えることが、どうして不安をあおることになるのですか？

◆甲状腺検査

私たち「DAYS 被災児童支援募金」と「未来の福島子ども基金」が、福島原発事故の後、甲状腺検査をしなければならないと思ったのは、チェルノブイリ事故の後長く、チェルノブイリの子どもへの支援を続けてきた経験があるからです。僕自身も実際にチェルノブイリ被災地で、甲状腺検査や手術に立ち会ったり、その後の支援を行ってきました。毎日毎日薬を飲まなければならない、その薬を日本から送るということもしました。現地のお医者さんから甲状腺検査のために新しい超音波診断機（エコー）が必要だと頼まれ、機械もたくさん寄付してきました。

福島で一昨年（2016年）に、国際専門家会議がありましたけれど、そこに海外専門家として呼ばれてきたのは、私たちが昔パートナーと一緒に活動していたお医者さんたちでした。

ウクライナではキエフの内分泌研究所が小児甲状腺がんの手術を一手に引き受ける専門機関で、トロンコさんという医者で教授がその所長でした。ベラルーシのほうは、子どもたちを手術するのがミンスク第一病院で、小児甲状腺がんの専門研究機関はアクサコブシナといい、そのドロズドさんという女性の医者で教授が、子どもたちの甲状腺がんを発見したり、手術後のケアをする機関の責任者でした。この2人と相談しながら、私たちは救援活動をしたのです。私たちの合言葉は「早期発見と早期治療が子

どもを救う」でした。ところが今の日本は、早期発見も早期治療も不要と言っているのです。

これらのチェルノブイリ被災国で小児甲状腺がんの権威者が権威者と呼ばれる所以は、その人ががんになった子どもたちのデータを持っているからです。一方で日本の甲状腺がんの権威者と言っても、福島原発事故以前は日本にはほとんど甲状腺がんの子どもはいなかったのですから、日本には小児甲状腺がんの専門家はいなかったわけです。今日本で専門家と言われる人々はみんなチェルノブイリ被災国に行って、トロンコさんやドロズドさん（それとベラルーシの甲状腺手術の専門家であるコズミチ教授）からデータをもらった人たちなわけです。

トロンコさんやドロズドさんは、日本の国際専門家会議に出席したと言いました。国際専門家会議は、福島の子どものことはもう検査の必要がないという提言書を、福島県知事に出しました。しかしトロンコさんやドロズドさんは、その提言書にはサインをしていません。

世界中の放射線医学の専門家たちや、原子力産業と強いつながりをもつ国際原子力機関（IAEA）や国際放射線防護委員会（ICRP）という機関は、チェルノブイリの時に小児甲状腺がんで亡くなった子どもの数は15人であるという数字を出しています。そのうちの5人はウクライナです。この数字が国際的に了解されている真実だと言われているのです。

僕はずっとおかしいと思って何回も聞いたのですが、同じ答えでした。しかし一昨年の夏にトロンコさんにどうしても聞きたいと言って、インタビューをしました。そして「あなたの言うようにウクライナでは5人しか亡くなっていないというのは正しいのですか」と聞いたのです。なぜ僕がそれを聞くかという、僕たちがケアした子どもたちの中で4人が亡くなっていて、あなたの言ったウクライナでの子どもの死者の中にこの4人の名前が入っていなかったからです。そしてトロンコさんがとうとう話してくれたのは、実際には甲状腺がんで亡くなった5人というのは、甲状腺がんの手術のために入

院して、そのまま退院することなく死んだ子どもが5人だったということを意味するというのです。なぜなら一步でも病院を出たあとなら、交通事故で死ぬかもしれないし、ほかの病気で死ぬかもしれないからだ、というのです。

だから甲状腺がんで亡くなった子どもの数は、ある程度分かっているけれど、その人が100%、甲状腺がんによってなくなったとは言えないとトロンコさんは言うのです。それで「じゃあ、かつて子どもの時に甲状腺がんになって、それから今までの間に亡くなった子どもたちの総数は何人ですか？甲状腺がんのせいだと言わなくていいから何人が亡くなっていますか？」と聞いたら答えは「265人」でした。これも全部把握している数字とは言えない。そのうち甲状腺がんの転移などで死んだ子どもの数は、どこで調べることができるのかと聞きましたら、「それは、自分たちの管轄じゃない、それは国立がん研究所の仕事だ」と言うのです。

私たちがチェルノブイリの犠牲者のことを聞くときに、そこにはこうしたからくりがあることを知って愕然としました。私たちが知っている数字というのは本当の数字じゃない。なるべく少なく見せるからくりがあったのです。

チェルノブイリの事故で亡くなった数を、IAEAなどが28人と言うのは、原発事故で消防士の人たちとか原発の運転士で亡くなった人のことをさします。しかし事故直後に急性放射線障害でモスクワの病院に運び込まれた人の数は、もっと多く、200人近かったはずです。その中で、3週間以内に亡くなった人が28人、この人たちが放射能のせいであることと認定されました。だけど、3週間以降に亡くなった人たちは、もう、放射能のせいであるとは100%証明できないということで線引きして、事故の犠牲者とは認めないのです。そういうところで線引きがしてあるわけですね。

実際に甲状腺がんの手術をした子どもの保護者たちは、病気が悪化している例を報告して、検査の縮小をしないようにと訴えています。

◆チェルノブイリの人びとに学ぶ

私たちは、福島原発事故の被災者にはどのような支援をすればいいのか考えるとき、いわゆる専門家たちがどのような恐ろしい答えを出そうとしているのか知る必要があります。なぜ彼らはそう考えるのかは、一言でいうと、それが原子力産業にとって都合がいいからです。健康被害のことを知らせると、まず責任ある国や電力会社が巨額の賠償をしなければなりません。放射能は人の免疫力を破壊しますから、あらゆる病気の原因を作るとは広島の場合でも分かっていますが、それを認めると大損害になるし、原発再稼働や原発の輸出もできなくなります。

私たちはたまたま救援活動の経験があったから、彼らの言い分はおかしいと考えることができました。しかし騙される人がどんどん増えています。その動きが、復興庁によって加速されています。福島復興のためには福島はもう大丈夫と言うことが必要だからです。おまけに2年後にはオリンピックがあります。それまでに多くの人を福島に戻す必要があります。福島では大した放射能は出なかった。それによる被害はない。ないものがあるというのは「風評被害」だ。安全な場所が汚染されているというのも「風評被害」で、福島の復興を妨げるものだ。たいした放射能が出なかったから、病気も発生するはずはない。甲状腺がんは放射能とは関係ない。心配する人も復興を邪魔する人だ。福島はまだ汚染されているから食物にも気を付けようというのも、解決した。すべて基準値以下だ。福島産の食品を買うのを躊躇するのも「風評被害」で「福島差別」だ。食べ物は確かに放射能を吸収する物質を畑にまいたことで、基準値を切っています。しかし今でも福島だけでなく北関東一帯では、出荷停止措置が取られている食品が多くあります。

私は「安全宣言」を急ぐことが、かえって住民の不安を煽ることになると思っています。さらに年間20ミリシーベルトまでの場所には子どもも妊婦も住んでいいなどは論外です。大人と子どもの放射能の影響は、大きな差がありま

す。大人にとって大丈夫な場所でも、小さな子どもにとって危険な場所はいっぱいあるのです。この日本は、子どもを守るという当たり前のことさえ、原発事故直後から全くしてこなかった国です。それはチェルノブイリ被災地の人さえ驚くことです。

◆保養の意味

私たちは子どもに焦点を合わせた支援を行うために、チェルノブイリ被災地で行なってきた「保養」も始めました。チェルノブイリ法という法律ができて、その中で子どもたちは保養させなければいけない、汚染地や汚染物質の吸収で免疫が下がってくるところで、どっかで上向きにさせなければいけないという考えでした。

放射能の値の少ないところで、そして汚染されていないものを食べて、自由でのびのびとストレスがかからないような生活をさせ、水に入っても、粘土を触っても、土を触っても、木の葉や落ちているものを拾っても大丈夫という、そういうような場所で子どもたちが遊びまわることが、免疫力を高めるという、チェルノブイリ被災国での保養支援の経験から確信をもちました。

事故が起これば、まず放射能から逃げなければいけない。「被曝は心配ない」と考える人々は、事故の時の避難さえ必要がない、と言っているのです。日本の法律では、子どもや妊婦が立ち入るどころか、大人でも飲食してはいけないくらいの被曝限度を年間 1 ミリシーベルトと定めているのですが、福島ではそれを 20 ミリシーベルトに勝手に決めました。

日本は人間よりも経済を優先する恐ろしい国です。せめて 1 ミリシーベルト以上の土地に暮らさざるを得ない子どもに「保養」というチャンスを作ることは国の義務ではないでしょうか。放射能の影響を受けやすい子どもたちが甲状腺がんになる確率が高いことは国際的にも知られているのですから、検査をちゃんとするのも国の義務です。

早期発見して早期治療をして、そのあともずっと毎日薬を飲んだり、転移していないか調べる検査をしなければならないのですから、放っておくなんてとんでもないことです。チェルノブイリ被災地では、お医者さんたちはパニックになっているくらい必死でした。とにかく早く見つけなければならぬから、超音波診断機や移動検診車が必要になり、運転手や看護師や医師の給料も必要となり、チェルノブイリ子ども基金からはそういう支援をしました。

◆甲状腺手術後の子どもたちの保養

先ほど話したベラルーシの甲状腺専門医のドロズドさんが、一度私に保養センター「ナデジダ」の所長に会わせてほしいと頼んできたことがあります。甲状腺の手術をした子どもたちが多くいるが、今、一番保養が必要なのはこの子どもたちだと訴えたのです。甲状腺がんになって手術した子どもたちは、いつがんの再発があるかとおびえています。どうやってこれから生きていったらいいかわからない。喉の手術跡を見せたくない、だから学校へも行きたくない、家に引きこもってしまう。それが病状を悪化させ、抵抗力を奪う。だから子どもたちを保養施設「ナデジダ」で引き受けてほしいと言ったのです。

しかし、ナデジダでは、手術後の子どもは引き受けられない、悪化したら責任が持てないと言いました。そのときに私は日本側からの提案として、お医者さんにしろ、医療機器にしろ薬にしろ、受け入れのために必要なことはすべて日本が責任をもってやるので、受け入れてほしいと頼みました。

こうして甲状腺がんの手術した子どもたち 200 人近くの保養が始まりました。これは成功を収めました。子どもたちが来た時と帰るときに受けた検査で、どれだけ回復したのかも目に見えてわかった。心理的なよい影響もはっきりした。

彼らは、それまで誰に対しても、自分の病気のことを言えなかった。閉じこもっているだけ

でした。このことは、他人事ではありません。今福島で現実起こっていることだと僕は思います。福島でも自分たちの被害を話せない状況が続きます。誰も責任を取らない状況です。

夏のこの試みは「日本週間」と呼ばれ、毎年夏休みごとに手術後の子どもたちの保養を行なって、日本からボランティアの人たちに行ってもらって、得意なことで子どもたちを楽しませました。日本の踊り、武道、陶芸、折り紙、習字を教えたりしました。この経験はナデジダを、生き生きした形で日本とつながっている場所にしました。

しかし手術をした子どもたちにとって、保養がもっと大きな意味を持っていることを知ったのは、つい最近のことです。子どもたちはナデジダに来るまでは、孤独なままでした。子どもたちは異性を意識したり、恋をしたりしますが、その都度自分の被曝の問題に戻されるわけです。自分は実は汚染されているんだと、異性にどうやって打ち明けようか。甲状腺の手術をしたんだということをいつか言わなければいけない。結婚の時は、向こうの家族親戚が反対する。そんな経験があって結婚して赤ちゃんを産んで育てる。

ウクライナの黒海沿岸にも、私たちは保養施設「ユージャンカ」を作りました。そこに 2016年の夏に、かつて手術したお母さんと子どもと一緒に招待しました。彼女たちが子ども時代に手術をしてからお母さんになるまで経験したことが、今の日本にとって必要です。福島のお母さんや子どもにとってもっとも大切な先生は、チェルノブイリの母親たちだと私は思っています。

彼女たちの精神的なケアにとって何が最も大切なのか。そのときにわかったのが甲状腺がんつまり放射能というのは現在も未来も生きている問題だということです。PTSD という言葉がありますが、P は POST つまり過去のことです。しかし放射能の事故の後の甲状腺がんや他の病気は、過去にはできない問題です。放射能という問題に関しては、過去の PTSD ではなくてオンゴーイングで現在進行形の問題、OTSD なのだと、

心理学の専門家から聞いたことがあります。だから多くの人が学んできた PTSD の治療では対応できないのです。過去形で治療するのは違うやり方の治療があるわけです。そういうことを知るために、チェルノブイリの経験者に学ぶということが本当に必要です。

ウクライナで若いお母さんたちが「子どもの頃にどういう思いで保養施設に来たのか」という話をしてくれました。彼女たちは保養施設で初めて自分の病気のことを打ち明けることができた。みんなが甲状腺の手術をした子どもたちだったからそれができた。それまでは、タートルネックとか大きな首飾りなどで手術跡を隠していたが、それを全く気にしないで、情報交換などをして、生涯の友だちと言える人に出会うことができた、と話してくれたのです。

私たちは保養施設がそこまでの役割をするとは思っていませんでした。「少し元気になってくれればいいな」。正直そんな気持ちでした。しかし彼ら、彼女らにとっては大変な事件だったのです。ある母親は「あなたたちは私たちが一番必要としていた時期に、一番大切なこと、必要としていたことをしてくれた」と言いました。その言葉を聞いた時、本当に嬉しかったですね。

ところが日本では今、「専門家」と称する人々によって、何もかもなかったことにされようとしています。今私たちが守らなければならないのは何か、真剣に考えなければ、福島原発事故の被害者だけでなく、今後起こる可能性があるすべての原発震災に、私たちは対処する道を閉ざしてしまうことになります。

(この問題について、6/28 に店頭及びアマゾンで DAYS JAPAN から発売される「**福島 被曝安全神話のワナ**」をご覧ください。被災した子どもたちだけでなく、未来の私たち全体の運命を左右する非常に重要な本です。☎03-3322-0233)

※紙面の都合で、一部割愛しています。全文は web 上に掲載しますので、そちらをご覧ください。

放射能市民測定室 たらちね

福島県いわき市で、汚染の実相を自ら検証しつつ、自分たちは何を失い、地域はどのように汚染されたのかを認識し、これからどのように生き、子どもたちをいかにして守っていったらよいかを日々の目的として活動する「放射能市民測定室たらちね」の事務局長鈴木薫さんのお話を抜粋してお届けします。

*

◆放射能の測定

私たちが置かれているのはどのような環境なのか——。福島では、チェルノブイリでは「移住の権利ゾーン」に当たる年間放射線量 5 ミリシーベルト以上の地域で普通に人々が生活しています。そういった地域から避難したいと考える人たちは「自主避難者」と呼ばれ、避難する権利も認められていないのが現状です。

たらちねでは、食品・水・土壌・資材・人体の中の放射能——ガンマ線（セシウム 134、セシウム 137）、及びベータ線（トリチウム、ストロンチウム 90）を測定し、結果はインターネットのホームページなどで公開しています。体内の放射線量を測るホールボディカウンターは年々稼働率が上がっており、除染作業員や原発作業員の方がよく測定に訪れます。

土壌を測定してみると、同じ敷地内であっても均一に汚染されているわけではないということが分かります。雨樋の下などは汚染が集中し、落ち葉が溜まりやすい所も汚染が高い傾向にある。いわき市平下神谷にある中学校の 2017 年 9 月の測定結果を見ると、高い所では、セシウム 137 と 134 の値がキログラムあたり 44,580 ベクレル。こういった中で子どもたちは半袖で体育の授業などを受けています。

また、小さな子どもは床や地面に坐って遊ぶので、お母さん方はとても心配しています。そこで私たちは、掃除機（ダイソン）のゴミの測定も行っています。いわき市の街中の空間線量は東京都と大して変わりませんが、掃除機のゴ

ミを測ると、いわき市の数値は圧倒的に高く、その差は歴然としています。

チェルノブイリと福島では爆発したときの状況が違うので、福島では低線量被曝の健康への影響はあまりないのではないとも言われます。しかし例えば、1950、60 年代、原水爆実験が全世界で多く行われていた時期の日本の子どものガン死亡率・増加率を示したデータがありますが、それを見ると子どもたちのガン死亡率は核実験に比例して上がっています（「全世界の核実験による日本児童のガン死亡増加率」瀬木三雄氏他、日本癌学会、1972 年）。直接に爆風を浴びて被曝したわけでもなく、影響があるということを感じます。

◆たらちね・こども保養相談所

たらちねでは、福島の子どものための保養施設「沖縄・球美（くみ）の里」子ども保養プロジェクトの受付窓口も行っています。保養は健康への効果だけでなく、同じ悩みを抱えた方たちが集って話し合える場所であることは、佐々木さんのお話にもあった通りです。保養の案内は、福島県内の教育委員会を通して各家庭に配布しています。県は保養にあまり積極的ではないという話も聞きますが、沖縄・球美の里については、その実績を無視できなくなっていると言えらると思います。

球美の里とは別ですが、福島県在住で海外への保養企画（17 日間）に参加した子どもたちの尿中セシウムを測定したところ、保養の前と後で、個人差はあっても、だいたいの数値は下がったという結果も出ています（「保養前後の尿中セシウム測定結果」データ提供：たらちね、協力：新宿代々木市民測定所、2017 年）。

◆甲状腺検診

たらちねの施設内だけでなく、福島県内や近隣地域で出張検診も実施しています。専門の医師が必ず保護者の立ち会いのもと、一緒にエコー画面を確認・説明しながら行い、検診終了後はエコー写真と検診報告書を手渡ししています。県も甲状腺検診を実施していますが、

小学生以上になると保護者の立ち会いが断られてしまうケースがあります。また、診断の結果、**B**や**C**といった判定の場合は再検査のお知らせが来るのですが、**A1**、**A2**の場合は判定結果が届くだけで説明はない。そのため心配でいてもたってもいられず、煩雑な個人情報開示請求手続きを経て、やっと自分の子どもの詳細な情報を得る人という親もいます。けれど、それを医師が説明してくれるわけでもないのによくわからない。やはり不安は消えない。そんな状況に因應するためにも、「たらちねクリニック」を開設して、小児科・内科の他、「子どもドック」も供えています。子どもたちの健康を守るということは、並大抵なことではないということ、この7年で実感しています。これからももっと努力し、がんばっていかねばならないと思っています。

最後に、原子力規制委員会が福島県内に設置しているモニタリングポスト（放射線監視装置）を2020年の東京オリンピックまでに撤去する方針を決めました。それに対して私たちは撤去しないよう、自治体や規制委員会にお願いをしています。日本には原発がたくさんあるのに、モニタリングポストは福島県以外にはほとんど設置されていません。でも、原発事故が起きてから設置していたのでは遅い。放射能は目に見えず、測らないとわからないから、事故が起きる前に設置しておく必要がある。むしろ全国にモニタリングポストの設置を求める運動を起こしていかなければならないと考えています。



*たらちねの活動や測定結果のデータ等は **HP** をご覧ください。 <https://tarachineiwaki.org/>

チェルノブイリ子ども基金

チェルノブイリ原発事故が起きてから今年で32年。年月の経過とともに状況はさまざま変化し、子ども基金の支援の対象や規模は少しずつ変わってきました。当基金事務局長佐々木真理の報告から抜粋してお届けします。

*

◆保養プロジェクト

私たちは毎年、ベラルーシとウクライナで保養プロジェクトを実施しています。病気の子どもを招いた保養や、子どもと親の保養を行っています。子どもの保養は当初、甲状腺がんの手術を受けた子どものみを対象としていましたが、2003年からは甲状腺以外のがんや血液病、遺伝病の子どもたちにも拡げています。

ベラルーシの北西部に、「子ども健康回復センター“希望（ナデジダ）”」という保養施設があります。年間を通して汚染地域に暮らす子どもが学校単位で保養することのできる施設です。安全で栄養ある食事、適度な運動、それぞれの健康状態に合わせた医療が施され、それにより子どもたちの体内放射能が20~30%下がることが明らかになっています。

2017年夏、「希望」での保養プロジェクトに参加した子どもは8~17歳の28人。ゴメリ市やゴメリ州の町や村に住んでいる子どもたちです。脳腫瘍、目の腫瘍、悪性リンパ腫、精巣腫瘍、卵巣腫瘍、腎臓がん、血管腫瘍、血小板減少性紫斑症、染色体疾患……などの病気を抱えていました。

またウクライナでは、ジトミール州という汚染地域の8~16歳の子どもたち42人を、ウクライナ南部ヘルソン州にある保養施設「ドルフィン」に招きました。やはりどの子どもも疾患、慢性の体調不良を訴えていました。

被害者家族のための保養は2008年から実施しています。10代の頃に甲状腺の手術を受けた親とその子どものための保養です。病気を抱えるチェルノブイリ事故被害者の子どもに対しては、

障害児年金の支給や通院のための交通費、公共料金などに優遇措置があります。甲状腺というのは手術で切除してしまうと生涯、ホルモン剤を飲み続けなければなりません。ところが大人となった彼ら、彼女らには、ウクライナ・ベラルーシとも、国からの支援はほとんどありません。この家族保養は、自身と子どもの健康をはじめ、同じ不安を抱える家族らと知り合える大事な場です。保養が終わった後も、お互いに連絡を取り合い、助け合っています。

◆里親制度

経済的に厳しく病気の子どものいる一家庭を、一人の日本の里親が支援する制度です。これまで支援した子どもは延べ 299 人。現在支援している子どもは 55 人。残念ながら支援途中で、あるいは開始直前に命を落とした子もいます。

支援している子どもの一人、ゴメリ州レチツァ市に暮らすナースチャ・G (2003 年生) は、生まれてすぐに心臓、股関節、目に異常が見つかり、1 歳の時に歌舞伎症候群 (精神遅滞を伴う原因不明の先天性異常症) と診断されました。



4 歳になるまで言葉を話さず、視力もとても悪く、医師からは、「成長しても歩行は難しく、知能も発達せず、会話もできない」と告げられたそうです。でもナースチャも家族も諦めませんでした。リトアニアにある専門のサナトリウムへ毎年通い、ウクライナの専門医の治療を受け、乗馬療法、イルカ療法……よいと思われることは何でもしてきた。どれが効果あったのかはわからないが、ナースチャはいま、歩けるようになり、少し話せるようになった、と母親は言います。教育必需品、最低限必要な食品を買

ったら、お金はほとんど残らないなか、一生懸命、お金を貯めて治療を受けさせてきたと。いま、病気を抱える人、骨折する人がとても多いとも話します。放射能で汚染された土地で採れた食べ物を食べているからではないかと。

◆教育、健康診断、保養の大切さ

最後に、子どもの健康を守るうえで大切なのは、教育、健康診断、保養であるということ強調したいと思います。「希望」では子どもたちの保養中、放射線について学ぶ機会を設けています。放射線の危険を知らなければ自分の身を守れません。日々の生活で、何をどのように気をつけるべきかを、子どもたち自身が学ぶことはとても大切です。

次に健康診断。どんな病気でも早期発見は大切です。私たちはこれまで病院へ、医薬品・医療機器を多く支援してきました。ウクライナは政情不安が続き、経済も悪くなっています。チェルノブイリ被害者に対する法律は存在していても、実際の支援はほとんど行われていない、そんな現地救援団体の言葉も聞かれます。

そして繰り返しになりますが、保養です。病気の子ども、その家族たちを孤立させない。保養の効果は身体健康だけではなく、保養を通して同じ境遇の仲間と出会い、辛いのは一人ではないとわかると、うつむきがちな気持ちは前向きになっていきます。また、親身になって心配し、助けようとしてくれる先生、医師、カウンセラーなどの大人たち。それらの出会いが、子どもたちの心に希望をもたらします。

チェルノブイリ被災地では、病気の子どもをもつ母親たちが自ら団体を作りました。お互い助け合い、国に支援を訴え、私たちのような外国のパートナーを見つけて活動をしてきました。その母親たちはいまも、孫世代にあたる子どもたちの支援を続けています。

日本の人たち世界の人たちが、チェルノブイリの被災者たちに関心を持ち続けてほしいと思います。それは福島原発事故の被害を少しでも減らすことに役立つはずで

チェルノブイリは果てしなく続く

子ども基金が支援をしているウクライナの救援団体「チェルノブイリの子どもたちの生存」から、4月26日に行われたチェルノブイリ32年の催しについて報告が届きました。

～ チェルノブイリは果てしなく続く ～

去る4月26日、ウクライナではチェルノブイリ原発事故32周年を迎えました。この日、国際慈善基金「チェルノブイリの子どもたちの生存」は、キエフ市内のナショナルセンター「ウクライナ会館」会議ホールで、「チェルノブイリは果てしなく続く」と題するブリーフィング会見を開きました。このブリーフィングでは、チェルノブイリ原発事故当時子どもで、放射性ヨウ素による被害を受けた人々の問題、さらにウクライナ北部のポーシェ地方に広がる放射能汚染地域に今も暮らす人々の問題がテーマとして扱われました。

今回の会見では、ウクライナ人民代議員（国会議員）で議会内チェルノブイリ委員会委員のパーヴェル・ジュブリク、ウクライナ内分泌研究所チェルノブイリ問題担当副所長ヴァレーリー・テレシチェンコ、甲状腺用製剤メーカー代表のクリスチーナ・クリヴォシェイナの各氏によるスピーチがありました。この中でジュブリク議員は、チェルノブイリ原発事故によって被災した子どもたちに対し長年にわたって様々な支援を行っているとして、日本のチェルノブイリ子ども基金への感謝を表しました。また、テレシチェンコ副所長は、ジトミル、キエフ、チェルニゴフ、ロヴノ及びチェルカシの各州の住民で、チェルノブイリの事故当時子どもや未成年の年齢だった世代の人々の内分泌学的な諸問題について報告を行いました。この中では、とりわけ甲状腺ガンの診断と治療の問題が重点的に扱われました。

このブリーフィングの後、会場のロビーでは、オヴルチ芸術小アカデミーで学ぶ、チェルノブイリの第3ゾーンに指定された地域に住む生徒たちの手による絵画作品の特別展が開かれました。



その後、「ウクライナ会館」コンサートホールを会場に、チェルノブイリ事故32周年の記念コンサートが催されました。このコンサートには、ウクライナ国立大統領楽団、さらにチェルノブイリ原発事故の処理作業に参加した経験を持つ一連の音楽家などが出演しました。そして演目の「カルパチア・ラプソディー」という曲が日本の「チェルノブイリ子ども基金」の支援者の皆さんに捧げる曲としてオーケストラにより演奏されました。

ホールの観客席には、ジトミル、ロヴノ、キエフの各州の放射能汚染地域に現在も住む児童生徒や教師たち、チェルノブイリ英雄記念チェルカシ火災安全研究所に学ぶ生徒たち、チェルノブ

イリ原発事故の処理作業参加者たち、さらにプリピャチやチェルノブイリ各市、その他の立入禁止区域に指定された居住地区から事故により避難した人々が集まりました。

また、子どもたち全員にスポンサーからお菓子のプレゼントがありました。

(*地名、人名は原文ロシア語表記に基づく)

<翻訳：平野進一郎さん>



ウクライナ内分泌研究所

昨年末、子ども基金は、ウクライナ・キエフ市にある内分泌研究所へ医薬品と放射線測定器を支援しました。報告と感謝の手紙が届きました。



内分泌研究所には、ウクライナ中から甲状腺の患者が訪れます。子どもの頃に甲状腺の手術を受けた患者たちは成人していますが、今も検査を受け続けています。患者たちが手にしているのはスウェーデン製の高品質の薬です（写真左下）。

放射線測定器を手にしているのは、放射線医療の専門家、サヴェンコ・タチヤナ医師です（写真上）。「これは患者が放射性ヨウ素治療を受けるのに大変重要なものです。以前にも子ども基金から放射線測定器を支援してもらいました。しかし大分老朽化していました。今回またご支援いただき大変感謝しています」

チェルノブイリ原発事故で被災した子どもたちに対する支援、並びに資金面での援助に関して、日本のチェルノブイリ子ども基金の皆様にご感謝申し上げます。頂戴した寄付金により、Euthyrox 剤（甲状腺ホルモン剤）3554 箱を購入いたしました。この薬は、甲状腺ガンの手術を受けた患者にとって必要不可欠なものであり、一生にわたって服用し続けなければならないものです。当該部門に登録されている、甲状腺ガンの診断を受けた若年層の患者は 4000 人近くを数えます。これらの患者たちは、内分泌研究所において治療とその後の経過観察を受けています。私どもの患者たちに対してこうして無料で Euthyrox 剤を提供できる機会を得られたのは、大変有難いことです。皆様からのご支援に心より感謝申し上げます。

2017年3月6日

V.P. コミサレンコ 記念
ウクライナ医学アカデミー 内分泌研究所
所長 M.V. トロニコ



<緊急支援 ユーリヤのその後>

2017年6月号ニュースで、医薬品の支援をしたウクライナのユーリヤ（子どもの頃に甲状腺がんの手術を受けた女性、現在33歳）について紹介しました。その後、10月号ニュースでは、「血液検査の結果がよくなった、薬の効果があつた」という本人からの報告を掲載しました。しかし「先月（2018年5月）、検査を受けたところ、副腎の腫瘍が2倍の大きさになり、発作も再発してショックを受けている」という連絡が届きました。また、甲状腺に関しては、以前と同じ薬を服用するように指示があつたが、副腎の治療については何も決まっていないということです。心臓にも影響が出ているため、さらに検査を受けに行くそうです。次の連絡を待ち、医薬品による治療が必要であれば支援をしたいと思えます。

「子ども健康回復センター“希望(ナデジダ)”」
ベラルーシ ミンスク州 ビレイカ地区

期間：5/20～5/31 参加者：8家族 24人(子ども12人：3～12歳、大人12人：32～45歳)

「チェルノブイリ被害者家族の保養」は今年で9回目。参加した母親8人は、子どもの頃甲状腺の手術を受けた人たちです。3人の母親は、子ども基金「希望」で開催した「甲状腺手術後の子どものための保養」に参加したことがあります。2人の母親は「希望」での保養は初めてでした。家族たちは大変仲が良く、子ども同士はいつも一緒に遊び、親たちはどの子も自分の子どものように面倒をみていました。

到着後の健康診断と問診により、滞在中は一人一人の体調に合わせた治療(マッサージ、水圧療法、塩治療、薬草療法、アロマテラピー等)を受けました。「希望」スタッフによる教室(手芸、陶芸、シンセサイザー、絵画、体操)には親子で参加しました。また親たちは、医師、看護師、カウンセラーによる様々なテーマの教室に参加しました。親たちが治療中の時、子どもたちは、カウンセラーのいる部屋で遊んだり絵を描いたりして過ごしました。野外で行われるゲームにも全員で参加して楽しみました。保養期間中は天気恵まれ、周辺の森や湖に自転車で出かけたり、バーベキューをしたり、施設内の遊具で遊んだりして過ごしました。

何人かの母親同士は、互いに子どもの頃からの知り合いでした。それは一緒に外国で手術や治療を受けたり、国内の病院でもよく顔を合わせていたからでした。違う町に住んでいたりして、普段会うことはあまりありませんが、連絡を取り合っているそうです。部屋で、外のベンチで、子どもを遊ばせながら、自分の体調のこと、検査や薬のこと、子どものこと、仕事のことなど、心を開いて話し合っていました。子ども基金の過去のカレンダー(「希望」の資料展示室に置いてある)に写っている子どもたちや親子の写真を見て、「あ、



この子、知ってる、この子も一緒に病院だった」などと話していました。

<参加者たち>

M・ターニャ(1980年生まれ) ブダ・コシェリョフ市 夫と息子二人と参加

チェルノブイリ事故当時はゴメリ州ブラーギン市に住んでいた。事故後は初め子どもたちだけ避難。その後、今の町に家族で移った。ブラーギンには年に一度お墓参りに行く。家は煉瓦造りで今も残っているが、他の家は朽ち果てているものが多く、悲しい風景。今住んでいる所からそう遠くないところにも汚染の強いところがある。ブラーギンは豊かな土地で作物がよく育った。今のところはあまり土がよくない。引っ越さなくてもよかったのではないかと思うこともある。私の母は甲状腺の病気、父は眼の病気、叔母は咽頭がんなど、



親戚に病気の人が多い。チェルノブイリは多くのものを残した。

手術後は甲状腺ホルモン剤を飲んでいる。検査は年に一度受けている。ベラルーシ製の薬は無料だが体に合わない。夫がロシアに仕事に行くときにドイツ製のチロキシンを買ってきてもらう。ベラルーシでドイツ製のチロキシンは処方箋がないと買えないが、ロシアなら薬局で普通に買える。値段も同じくらい。甲状腺手術を受けた人は、カルシウム剤を飲んでいる人も多いようだが、私はカルシウム値は問題ない。牛乳やチーズなどをよく食べているからなのかもしれない。

私は店員の仕事、夫は運転手をしているが、農作物は自分のうちの畑で作っている。家畜もいる。それがなかったら暮らしていけない。

初めてここで保養をした。何もかも素晴らしい。毎日よい空気の中で、家族みんなで自転車で走ったり、もうそれだけで気分がよくなり、体調も良くなったと感じる。招待してくれた日本の人たちと希望のスタッフに感謝している。

P・エレナ (1983年生まれ) レチツァ市 娘二人と参加

事故当時はゴメリ州ホイニキ地区バプカ村 (30キロ圏内) に住んでいた。事故後、私のような年齢 (当時 3 歳) の子は母親と一緒にバスでサナト



リウムに連れて行かれた。身分証明書と小さい荷物だけ持って、サナトリウムを転々として、いくつかの村にも避難した。父や年長者は後から避難した。家畜や家具などみんな置いてきた。その後、避難者用の家が建てられ、今の町へ家族で移住した。同じ町の多くの家族もそこへ移住した。

甲状腺の手術は 8 歳と 10 歳の時。イタリアで保養やホームステイをした。その頃一緒だった友人たちとこの保養で再会できてとてもうれしい。

長女マーシャは生まれつき足に問題があった。今は眼に問題がある。自分は看護師をしているが、最近大人のがんがとても多いように感じる。職場に採用されたとき、あとで私がチェルノブイリ障害者証明を持っていることがわかり、「これがあるなら雇わなかったかもしれない」と言われた。

この保養に招待してくれたことに心から感謝している。自分と夫の給料ではとてもできない。

S・ターニャ (1984年生まれ) チェチェルスク市 娘二人、夫と参加

事故当時はチェチェルスク地区ブジシチェ村に住んでいた。その後今の町に移住。私はまだ乳母車に乗っているような年齢だった。

甲状腺の手術を受けるまでは、音楽学校で声楽を学んでいた。活発で走り回っているような子どもだった。手術後、声帯が損傷して声が出なくなり、歌の道に進むのを諦めた。体育の授業にも出られなくなった。今は長女ダーシャが歌や踊りが得意。自分の病気も悲しいが、兄と父が (当時 40 歳) 同時期に亡くなった。今思い出しても涙が出る。長女はこの保養に来る前の検査で甲状腺の



問題がみつかった。今は経過観察で薬を飲んでい
る。

出産前まで働いていた職場を解雇された。企業
や工場は人員削減が続き、小さな町で仕事を探す
のは難しい。その後、たまたま近所の薬局で仕事
が見つかって運がよかった。夫は建設資材の工場
勤務。子どもたちの面倒をよく見てくれる。

G・エレーナ (1983 年生まれ) ゴメリ市 娘、夫と 参加

事故当時はモーズィリ市に住んでいた。結婚を
機にゴメリに引っ越した。甲状腺手術を受けたの
は 16 歳の時。ミンスクの病院で日本人の医師が手
術をした。病気と手術のことを知ったとき、恐怖
というより、早く終わらせてスッキリしたい、と
いう気分だった。そのときは病気の深刻さをよく
わかっていなかったから。手術後、人によっては 2
-3 時間で麻酔から覚める人もいるというが、私は
翌日やっと意識が戻った。初めのうちは小さなか
すれ声しか出なくてショックを受けた。

子ども基金のプロジェクトも含め、私は何度か
サナトリウムに行った。同じ手術を受けた人でも
一度もサナトリウムに行かなかった人もいる。国
からの年金もあったし、自分はまだよい方かと思
う。学業は問題なかった。かえって優先された。
でも就職は大変だった。チェルノブイリ被害者証
明があるとなかなか雇ってくれない。今は個人で
裁縫の仕事をしている。お客さんの要望に応じた
洋服を縫っている。人に喜んでもらえる仕事は楽
しい。

<参加した母親たちへのアンケート>

質問 ①保養の前と後で体調に変化はありまし
たか。②子どもの頃甲状腺の手術を受けてどのよ
うなことが辛かったですか。③福島原発の事故後、
子どもの健康を心配している日本の母親へ伝えたい
ことは何ですか。④甲状腺がんの手術を受けた
日本の子どもへ伝えたいことは何ですか。

◆・・・◆・・・◆

G・レーナ 35 歳

- ①新鮮な空気と治療のおかげで体調がよくなった。
- ②手術を受けた時は病気の深刻さを全く理解して

いなかった。今ははっきりとわかる。手術は成功
したが回復に時間がかかった。今の時点で健康に
問題はない。③忍耐と、いまこの時を大切にす
ること。自分の健康に常に注意をすること。健康診
断も大切。できるだけきれいな空気の下で過ごす
ように。④手術後は必要な薬を飲んで、必要な時
期に検査を受けていれば、前のように暮らしてい
くことができます。手術後、約 20 年が過ぎまし
た。いま私には家族があり、健康な子どもがいま
す。自分の夢と価値観を大切にしてください。日
本の甲状腺の手術を受けた子どもたちには、絶対
に諦めないでと伝えたい。それで終わりなどでは
なく、人生は続きます。

◆・・・◆・・・◆

K・イリーナ 33 歳

①体調はよくなった。いろいろな治療と、新鮮で
きれいな空気。食事も素晴らしかった。②体の負
担が辛かった。体育の授業、自転車に乗ったり、
友だちと遊ぶのもつらかった。いろいろなことが
制限された。③医師のアドバイスを受け、自分の
健康に気を付けること。汚染のないところへ引
越すことも考えてみては。ただ私の場合もそうで
すが、一度被ばくしてしまっていますので、いつ
かその影響が出てしまう可能性はあるかもしれま
せん。④ご健康と幸福をお祈りします。人生は続
きます。過去のことをあまり考えず、前を向いて
生きて行ってください。

◆・・・◆・・・◆

P・エレーナ 35 歳

①疲労感がなくなった。治療のおかげで体が楽に
なったように感じる。気持ちにも力がわいたよう
な気がする。②手術前はとても体が弱っていて、
疲れやすく、ひどい頭痛があった。いま健康に問
題は感じていない。③皆さんのご健康をお祈りし
ます。私の家族は汚染地区から移住しましたが、
私は病気になりました。でもそのまま住み続け
ていたら、もっと状況は悪くなっていたかもしれ
ません。汚染地からの移住については、住んでい
る人たちの意見を聴きながら、国家が決めなければ
いけないことだと思います。④子どもの頃は多く
の時間を病院で過ごしました。今は年に一度検査

を受けています。薬をきちんと飲み必要な検査を受けてください。自分の健康をいつも気遣ってください。

◆・・・◆・・・◆

N・エレーナ 32歳

①気分がよくなった。②手術後、麻酔から覚めるまで時間がかかった。普通に食べたり飲んだりできるまで、時間がかかった。両親と離れて一人で入院しているのが辛かった。③病院での検査をよく受けてください。強い気持ちをもって、きっとよくなると信じてください。もし可能性があるなら、汚染のないところへ引っ越してください。④健康を祈っています。絶対に諦めないでください。きっとよくなるはずです。



◆・・・◆・・・◆

G・アンナ 35歳

①頭痛から解放された。②たくさんの治療を受けなければならず辛かった。③もしできるなら汚染のないところへ引っ越した方がよいのかもしれません。心を強くもってください。私たちはあなたたちとともにあります。④諦めないことが大切。きつとうまくいく、と信じてください。共に立ち向かっていきましょう。私たちにはその力があると思います。

◆・・・◆・・・◆

S・タチヤナ 36歳

①全体的によくなった。頭痛はなくなり気分がよくなった。②習っていた歌を続けられなくなった。治療が長く続いた。学校で体育の授業ができなくなった。③可能であれば非汚染地へ移住するのがよいと思います。汚染地に住み続けるのは危険で

す。私たちは汚染のある村から今住んでいる町へ移住しました。町にも汚染はありますが、以前の場所よりは少ないです。④日本の子どもたちが健康で幸せに暮らしていけるよう心から祈ります。なるべく楽観的な気持ちで。未来を見つめて、愛すること。甲状腺ホルモンやカルシウムの検査を定期的に受けること。そうすれば人生は続きます。勉強して、働いて、好きなことをして生きて行ってください。結婚して、子どもを産んで育ててください。どうかこのことを恐れないでください。私にはかわいいくて健康な二人の娘がいます。

◆・・・◆・・・◆

P・オリガ 35歳

①体調がよくなりました。頭痛がなくなり、心が落ち着きました。②手術後、首の傷跡の痛みが辛かった。とても喉が渇いたが飲むことを禁止された。声も出なくて、どうなっていくのか不安だった。手術、治療の間、両親やきょうだいたちと長く離れているのが辛かった。再度手術を受けたのもつらかった。③気持ちを強く持ち、決して諦めないで。そして、必ずよくなると信じてください。もしできるなら、福島から離れたほうがよいと思います。頻繁に検査を受けて健康に留意してください。④ 諦めないで、きっとよくなると強く信じてください。前向きな気持ちでいることも健康回復に大切なことです。

◆・・・◆・・・◆

M・タチヤナ 38歳

①大変体調がよくなった。気持ちに新たな力が湧き、食欲もでた。私も子どもたちも積極的になり、体重も少し増えた。②初めは病院や医師を恐れた。頻繁に検査や治療に行かなければならず辛かった。疲れやすかった。③よいことを考えるように、パニックに陥らないようにしてください。医師のアドバイスを受け、できれば汚染のないサナトリウムなどでしばらく過ごしてください。移住するかどうかの判断はそれぞれの事情によると思います。④よい方向に考えたほうがよいと思います。諦めたり、不安になったりしないで、幸せになることを思いながら生きてください。健康と幸福をお祈りします。お互い愛し合い、笑顔でいてください。

チェルノブイリの歌声 ～みなさまからのメッセージ～



<4/20 講演会来場者の感想>

◆安全神話のまき返しがかここまで進んでいることに驚きと怖れと憤りを感じました。あったことをなかったことにしない、を肝に命じて、あつけらかんと言いつけようと思います。(60代) ◆避難指示解除の福島線の線量の高さも気になります。子どもを育てる場合、食べ物も心配になってきます。甲状腺がんの件数も増えているし、保養の必要も感じます。データがないため原因がつかめない、といったその場限りの日常にとってもやりきれなさを感じます。チェルノブイリの哀しみは、福島にもいえること。子どもたちが元気になる保養や、日々の線量をチェックするなど、一日も早く体力を回復して、未来が開けるよう、いのりたいです。

(50代女性) ◆7年がたち、少しずつ原発事故の放射能汚染に対する恐怖がうすれて、生活しやすくなりましたが、それでいいのか……。立ち止まるきっかけを頂いたように思います。今日のお話の中で、私の心の中に残ったのは、子どもたちへの教育の大切さです。我が子も小1、小3になりました。就業前まで6年間、保育園にお弁当を持参させて頂きました。今までその理由を子どもに聞かれても答えず、はぐらかしてきましたが、そろそろ伝えるべき時かなと思いました。自分で危険なものを避けられる知識や行動力を身につけさせたいです。(40代女性) ◆広河さんのお話で、今福島を隠そうとする勢力の恐ろしさを認識しました。東京オリンピックなども、目をそらさせる大きな力。政府がやっていることは、すべてその方向にすすめようとしている今、許せないです。お金を海外にバラまいて、福島へのケア、弱い者たちへのケアに使われていない。私たちはもっと恐れ、怒ろう！貴重なお話、ありがとうございます。(60代女性) ◆オリンピックを機に、フクシマはなかったことにされるのだろうか。今日、参加して、改めて、声をあげ続ける大切さを感じた。被害者がなぜバッシングされなければならないのか。加害者の東電、政府がどうして強気でいられるのだろうか。次世代に責任をおわないもの

に、未来はない。(60代男性) ◆たらちねの鈴木さんのデータに基づくお話がとても良かった。モニタリングポストを全国に拡げる必要あり。広河さんの新たな福島差別論に関する話。チェルノブイリ救援から学んだこと。早期発見、早期治療。保養の必要性。現在進行形の放射能に対するリハビリセンターの役割を日本でも学び、生かさねばならない。(60代女性) ◆危機感を強くした。自分の子どももこれからの子どもも、守りたい！もっと勉強する。行動する!!(20代女性) ◆初めて知ること、たくさんありました。日本はどうも論点がおかしいというのか、やっぱり変だなと思うことが多々あります。今日お話を聞けてとても良かったです。この夏、沖縄・球美の里のボランティアに参加したいと思っているので、自分なりに調べたり考えていきたいです。(10代女性) ◆人間のために作られたはずの、一見「完璧」なシステムが、実はバグを発生させており、一番弱い人たちの身に降りかかっているとき、私に何ができるのだろうか。弱い人たちが声をあげられずに、「誰も声をあげないから、システムに問題はない、完璧である」と、システムを運営する側にいる強い人たちが主張するとき、私に何ができるのだろうか。無力な私にも、何か一つ、できることがあって欲しい。祈る気持ちで今日は参りました。(30代男性) ◆たらちねの活動が子どもたちの健康にとってとても重要なこと、鈴木さんが「子どもたちの健康を守っているのが並大抵なことではない」とおっしゃったことの意味、厳しい現実を強く感じさせられました。広河さんのお話は、今の状態への危惧を感じていたので本当にうなずきました。「ウクライナでは市民が、医者が、皆、怒った」との言葉に、他のことでもそうですが、日本はもっと怒らないといけません。(60代女性) ◆日本の状況の悪化は、思っていた通り。最初に心配した通りに進んでいると思う。周りの母親たちも、「どうせ頑張っても変わらない」「言うだけ大変なだけ」「もう考えたくない」という声が多くなっていると感じる。(40代女性)



募金・救援状況



●募金状況 2018年2月～5月 (単位:円)

	2月	3月	4月	5月
募金件数	183	223	70	43
救援寄付金	573,261	345,732	1,172,500	645,923
保養費	131,000	67,850	72,000	101,360
里子支援	157,300	57,810	50,430	211,030
ニュース購読費	66,000	52,000	24,000	10,000
イベント賛同金・会場募金	61,000	83,000	17,000	0
合計	988,561	606,392	1,335,930	968,313

*4月救援寄付金には、(株)カタログハウス様より運営費としての募金100万円を含みます。

*その他、切手、ハガキなどのご寄付をいただきました。

●救援状況 2018年2月～5月 (単位:円)

◎チェルノブイリの子どもたちの生存	
保養費	1,108,700
現地銀行手数料	3,326
<ベラルーシ>	
◎困難の中の子どもたちへ希望を	
里子支援(半年分×1人、1年分×1人)	101,169
スタッフ給料4人(2018年1～12月分)	269,376
車修理代	44,902
5月家族保養バス代	78,568
8月子ども保養列車代	43,773
◎チェルノブイリのサイン	
里子支援(1年分×2人)	134,688
スタッフ給料(18年1～12月分)	7,857



★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 ○一九店(ゼロイチキョウ店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリゴモキキン

(3)三菱東京UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金

♥ 団体名一覧 ♥

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただいております。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

【2月】生活協同組合パルシステム東京／東京一般労働組合 東京音楽大学分会／北陸学院高等学校・中学校／ケイ歯科クリニック／覚正寺／高山別院 飛騨仏教青年会

【3月】若松栄町協会内 One Voice AIZU 実行委員会／(株)音楽センター(印税)／日本ユーラシア協会

【4月】日本ウクライナ文化交流協会／(株)カタログハウス／浄土真宗西嘉穂組

チェルノブイリ32周年救援キャンペーン 収支報告			
収入		支出	
入場料	243,100	講演会	
賛同金	144,000	会場費	64,000
会場募金	53,078	舞台費	30,000
物販益	35,700	印刷費	35,738
		発送費	106,614
		事務費	41,818
		交通費	22,940
小計	475,878	小計	301,110
		収益	174,768
合計	475,878	合計	475,878

募金を含む収益金 174,768円

多くの方にご来場、ご協力いただきましたことを深くお礼申し上げます。

♥チェルノブイリの子どもたちへの支援 122,338円

♥福島の子どもたちへの支援 52,430円

収益金は以上のようにさせていただきました。

＊ ＊ 2018年版チェルノブイリ救援カレンダー ＊ ＊

収益金 1,222,067円 (5/31現在)

多くの皆様のご支援、ご協力に心より御礼申し上げます。上記のうち、244,413円を福島の子どもへの支援といたします。※イベント・カレンダー収益とも、福島の子どもの支援は「未来の福島子ども基金」を通して活用されます。

<https://fukushimachildrensfund.org/>

事務局から

■「基金ニュースター」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースターをお送りしています。またニュース購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。(※ニュースターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。)

■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいただける方を募集します。どなたでもお気軽にご参加ください。次回予定 10/20(土)午後1時~4時頃まで。ご都合のよい時間帯だけでも大歓迎です。場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10階) ※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時~午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

■里親募集

本号9頁に紹介している里親制度について、ご関心のある方は事務局までお問い合わせください。詳しい資料をお送りします。現在、3人のベラルーシの子どもが支援を待っています。

■東井怜さんを偲ぶ会

8/19(日)、開場 13:30、開始 14:00

会場 ココネリホール(練馬駅前) 会費 1000円

チェルノブイリ子ども基金の設立当初から活動に関わり、さまざまなご協力をくださった東井怜さんが3月22日急逝されました。有志で東井さんを偲ぶ会を開きます。

1990年「チェルノブイリ基金」が発足、91年に「チェルノブイリ子ども基金」と名前を変更。同時に埼玉県新座市で「チェルノブイリと核の大地広河隆一写真展事務局」が発足。当時、写真展事務局は子ども基金の事務局も兼ねていました。その事務局の部屋を提供してくれたのが東井さんでした。その後東井さんは、子ども基金が支援していた、ベラルーシ・ミンスク小児血液病センターの看

護師で、幼い息子を亡くした女性を日本に招き、チェルノブイリの実情を広めるため全国ツアー(福島、新潟、青森など)を行いました。

連絡先: mukai_y26@pi5.fiberbit.net

fax/048-470-1502 090-3539-7611(向井)

参加希望の方はメールまたは fax をお願いします。

*** ご協力いただいているみなさまへ ***

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

すべての方に振込用紙を同封しております
事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

「受領確認の葉書」をご希望の方へ
通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

★編集後記★

子ども基金事務局は5月12日に

下記へ移転しました。同じ練馬区内ですが、住宅街の一軒家から、今度は、商店街にあるマンションの一室です。部屋は大分狭くなりましたが、駅、郵便局、銀行などが近く、便利になりました。石神井公園にも歩いて行けます。この地でも新たなつながりをつくっていきたくと思っています。

このニュースを編集集中、大阪北部で大きな地震がありました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

※新住所 〒177-0041 東京都練馬区石神井町 3-16-15-408

Tel/Fax 03-6767-8808

E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.coocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>